

平成 18 年度

## 四国内における合意形成技術者の交流勉強会

### 【発表概要】

主催：(社)土木学会四国支部 土木技術者における合意形成運営技能の評価方法に関する研究調査委員会

共催：特定非営利活動法人 ピーアイ・フォーラム

特定非営利活動法人 コモンズ

特定非営利活動法人 高知まちづくり支援ネットワーク

#### - 目 次

<b>1 事例発表会の概要</b> .....	<b>2</b>
<b>2 四国各県の事例</b> .....	<b>3</b>
2-1 「拾町交差点緑化整備」(愛媛県) .....	3
2-2 「重信川自然再生事業」(愛媛県) .....	5
2-3 「国道 11 号大内白鳥バイパス」(香川県) .....	8
2-4 「高松市交通バリアフリー基本構想策定について」(香川県) .....	9
2-4 「高松市交通バリアフリー基本構想策定について」(香川県) .....	10
2-5 「徳島県みなと緑地広場ワークショップ」(徳島県) .....	12
2-5 「徳島県みなと緑地広場ワークショップ」(徳島県) .....	13
2-6 「子供たちによる景観計画づくりワークショップ」(高知県) .....	17
2-6 「子供たちによる景観計画づくりワークショップ」(高知県) .....	18

## 1 事例発表会の概要

合意形成に携わった技術者がどのような判断の下、どのような技能をもって事業に関わる人々の合意を図っているのか、といった観点の知見を得ることを目的に、「市民参加の運営技術 ～経験とその評価～」というテーマで四国内の合意形成に関する 6 事例について実際に実務を行なった技術者の発表を行う「四国内における合意形成技術者の交流勉強会」を下記のとおり行なった。

日時	平成 19 年 1 月 13 日 (土) 13:00 ~ 17:00
場所	愛媛大学 総合情報メディアセンター
参加者	72 名
発表者	愛媛県 『拾町交差点緑化整備』 株式会社オリエンタルコンサルタンツ 中埜 智親 愛媛県 『重信川自然再生事業』 株式会社四電技術コンサルタント 笹山 和延 香川県 『国道 11 号大内白鳥バイパス』 復建調査設計株式会社 加藤 久明 香川県 『高松市交通バリアフリー基本構想策定について』 株式会社オリエンタルコンサルタンツ 緒方 剛 徳島県 『徳島県みなと緑地広場ワークショップ』 株式会社環境防災 松永 昭博 高知県 『子供たちによる景観計画づくりワークショップ』 高知工科大学 嶋岡 強太

以下では四国内の 6 事例について発表の要点を整理したものを示す。

## 2 四国各県の事例

### 2-1 「拾町交差点緑化整備」(愛媛県)

発表者：株式会社オリエンタルコンサルタンツ 中埜 智親

#### (1) 事業の概要

市民を対象とした合意形成では、参加者から出された意見をそのまま事業に反映することと考えがちだ。しかし、景観を対象とした本件は、立場の異なった参加者に対して、適切に情報共有を図り、達成感や充実感を得ながら合意形成を図ることに重点を置いた。

本件は、松山市内の渋滞緩和を目的とした交差点立体化事業に合わせて行われる緑化整備について住民参加型で検討したものである。緑化整備を住民参加で行った背景は、道路事業の広報であるとともに、地域の方々の道路への愛着の醸成を狙ったものである。

住民参加による検討は、7人3班21名によるワークショップ形式で進めた。

ワークショップを行うにあたって、重要視したのは道路緑化という専門的な検討事項であるため参加者間の情報共有である。このため、緑化整備箇所を参加者全員で現地確認を行うとともに、別途作成していた模型を活用し参加者間のイメージの乖離を生じさせないようにした。

検討にあたって、本件は、計画段階から施工段階まで別途検討を行っている一部であり、検討内容、検討範囲及び事業への反映方法等について予め周知し、位置づけを明確にするとともに認識の共有を図った。

意見聴取に当たっては緑化整備という特性を鑑み、地域特性を踏まえた樹種について樹種の特性等を取りまとめた資料を参考資料として提示した。このため、参加者からの意見は、発散することなく現実的な意見でとりまめる事を可能とした。(ただし、参考資料にない自由な意見についての制約は設けなかった。)

意見聴取結果から、緑化整備が困難な箇所(高架下の緑化)は、その場で判断をせずに、検討を行ったうえで試験施工を実施し、緑化の可否について検討した後に判断することとした。(試験施工：継続中)

このため、合意した緑化整備案が、試験施工の結果から実現が困難となることを予め想定しその対応策(代替案)を参加者に対して合意を図った。

なお、これらの意見聴取結果及び試験施工結果(検討結果)は、参加への回答ということからもインターネットや広報誌を活用し、広報を事業の進捗とともに実施した。

#### (2) 本事業のポイント

- ・参加者間の情報共有
  - ・参加者の達成感や充実向上
  - ・参加者の意見に対する適切な対応
- (その場で答えられない事項は、可能な限り適切に検討等を実施し回答する。)
- ・それぞれの立場に応じた役割の遂行。特に調整役 = みんなの思いを翻訳し、プロセスプ

ロディースができる専門家がふさわしい（専門的知識を有するコンサルタント、学術経験者などの第三者的立場）

### （3）今後の課題

合意形成の実践的な場の提供をおこない、実践 + 技術伝承を図る。

### （4）質疑応答

Q1 「参加者抽出の経緯が不明。参集の範囲は？」

A1 「砥部町をとおして、参集。範囲は沿道住民の代表」

Q2 「自由参加型か？」

A2 「強制ではないが、情報からピックアップした」

Q3 地元の人ならではの着眼点は？

A3 「“とちの木”を大事にしたい、という声聞かれた。街路樹としては、“とちの木”は落葉などの課題がある木。だが、その経緯を地元から説明されて納得した。技術的な方向だけでは、“とちの木”という意見は出ない。この土地に住み、ともに生きてきた人しか知らないこと。住民の思いからくる由来を聞いて感心した。」



写真 6-1 現場視察の様子



写真 6-2 ワークショップの様子

## 2-2 「重信川自然再生事業」(愛媛県)

発表者：株式会社四電技術コンサルタント 笹山 和延

### (1) 業務概要

重信川のより良い自然環境の保全・再生に向けて、PIによる計画づくりを実施

- ・ 平成 14～15 年度：重信川いきいきネットワーク計画
- ・ 平成 16 年度：松原泉の再生計画

自然再生という長期的な取り組みを市民とともに取り組み、説明責任を果たしながら進める必要がある。

### (2) 事業の必要性

- ・ 河川環境の悪化に伴う流域環境の悪化・動植物の減少・水質悪化
- ・ 動植物の生育環境を取り戻し河川・泉を市民の身近な場に取り戻す

### (3) 関係団体・計画

#### はぐくむ会

- ・ 地域の大学、NPO 等の活動団体、行政がひとつになって設立 (H15.1)
- ・ 構成員約 1,000 人の組織

#### 重信川いきいきネットワーク計画

基本方針を定め、多様な意見を集め反映 (学習と交流の場へ、長期的取り組みのための市民参加)

- ・ アンケート収集 (市民と小学生) + ヒアリング
- ・ 各種検討委員会の開催 専門や対象別の委員会
- ・ 情報双方向性
- ・ 再生事業対象箇所 (案) の設定 (そのひとつに「松原泉再生事業」)

#### 松原泉の再生計画

この地域より上流は瀬切れがたびたび発生する区間

目的：松原泉の再生と重信川をつなぐ小川の再生 (水のネットワークの形成)

多種多様な動植物の生息空間の確保

多くの人々の環境学習の場

重信川と松原泉 (現在「瀬切れ」がひどく環境悪化) をつなぎ、蛍の飛ぶ水辺学習の場に。

メンバー：「松原泉を再生・保全する会」(H15.9 設立)

地元地域小中学生、自治会・公民館、愛媛大学

活動内容：松原泉再生のワークショップ

保護者を含む高井・森松地区の小中学生の住民が対象

愛媛大学二神先生指導の「重信川の自然をはぐくむ会」がファシリテート

**Step1** 重信川や泉に関する知識向上

泉に関する勉強会

**Step2** 松原泉再生イメージの確認

現地見学会によるイメージ確認（子供）類似整備計画の計画（香川県土器川）  
の見学会を実施

**Step3** 松原泉の再生に向けた具体案の検討

具体案の検討は、遊びの要素を取り入れながら意見抽出

**Step4** 生物等に配慮した具体的な整備方法の確認

生物の専門家からの意見

**Step5** 検討結果の確認と合意形成

検討結果の合意形成（1～5の各検討段階の意見集約）  
検討結果の関係者への説明

**松原泉の再生に向けた基本方針(案)**

- ・ 昔の松原泉（生き物がいっぱいいる泉、子供たちが安全に遊べる泉）
- ・ ホタルが飛ぶ小川

**(4) まとめ（特徴と課題）**

<特 徴>

- ・ 多様な主体の参画により計画づくり(重信川のはぐくむ会、松原泉を保全・再生する会、地域の小中学生等)
- ・ 大学生の積極参加による場の形成効果
- ・ 地域の大学の積極的な参画（ファシリテーター、大学生のエコリーダー）
- ・ 模型活用・類似事例見学会（住民理解の促進、活発な意見交換の促進）

<課 題>

- ・ 就労世代（30～40代の参加者をどう募るか）
- ・ 維持管理（具体的な役割分担など）

**(5) 質疑応答**

Q1（感想）

「時代を担う次世代のユーザーをうまく事業に取り込んでいると感じる。ほたるについてだが、やはり、持込に関しての要望を持つ人が多い。ある地域では、小川の掃除をするとほたるがきて、地域外から人が来るようになったので、草刈をすると蛭が住みやすい環境が変わっていなくなってしまった例もある。専門家の意見をうまく取り入れ事業を進めていると感じた。」

Q2 「水の専門家と地域住民のコミュニケーション創出や合意の演出方法の仕掛け作りのポイントは？」

A2 「一番泉（松原泉の上流）から水を引くことになった。上流側にも合意を得、活動参加をお願いして趣旨を理解していただいたのでうまくいっている」



写真 6-3 松原泉保全会による土器川生物公園の見学



写真 6-4 重信川の自然をはぐくむ会開催風景

## 2-3 「国道 11 号大内白鳥バイパス」(香川県)

発表者：復建調査設計株式会社 加藤久明

### (1) 事業の概要

事例背景としては今より 10 年前、PI への取り組みが始まったころ。慢性的な渋滞緩和と、明石海峡大橋開通に向けた幹線道路整備。当時高速道路は未整備。郊外のため、当時は線引き無の都市計画区域外。

### PI 導入の経緯

建設省も PI を推進、住民の意見をききたいとの取り組みで、当時としては、試験的な取り組みで「地域に密着した事業への住民参加の促進」、「国民のニーズが直接把握できる仕組みの充実」を目的に実施。

### PI の効果としての期待

道路計画の透明性及び信頼性の向上

道路に対する愛着の向上

地域づくりへの住民参加

### 「まちづくり・みちづくり検討会」の実施

地元住民の代表者等で構成した検討会を設置

地域住民の意志を反映させながら幹線道路整備計画の策定を推進

検討会の流れについての説明と情報提供を実施

検討会は、計 4 回実施（一般公開あり）

情報公開は広報誌を主体に実施

- ・一般公開型検討会、ヒアリング、アンケート実施 + 情報公開（広報誌と記者会見）
- ・アンケート回収率（郵送回収）55%（かなり高い = 関心の高さを示している）
- ・検討委員会には、一般住民も必要に応じて参加。そのつど情報提供
- ・第 4 回検討委員会で提言書を取りまとめ
- ・冊子とダイジェスト版パンフレットを作成

### 技術者は何に関わったのか？

この PI で何に関わり、何を行ったのか？

初の取り組みということで、参考にすべき PI の実施事例がない

何をどう進めるべきかが未確定でのスタートだった

（参考は建設省本省から送られてきていた大まかな概要フローのみ）

PI 全体（検討会）の運営方針（案）を検討・提案

PI は従来の委員会形式と何が違うか？何を変えるべきか？を検討した

- ・主な検討項目



検討会のスタンス

検討会メンバー構成

検討会での議論の出発点（論点）

検討会の開催段階と審議内容（全体の開催イメージ）

地域住民への公表方法 など

上記について、方法・内容、期待される効果と懸念される事項、対応策を提示した。

着手前に、発注者と受注者が検討会の方法、効果・課題などの認識の歩調を合わせた。

開催段階では、検討会終了後に審議内容等のフロー見直しを行ったほか、ヒアリング・アンケートの設計・実施・集計・分析を行った。

### 提言書の作成

- ・ 検討会終了時に広報資料の取りまとめと作成を実施
- ・ H9～H10で事業化決定、H16で用地買収 順調に進捗
- ・ PI導入効果、環境影響評価書縦覧なども反対意見が出ない 地元からの要望事業（反対意見が出にくい委員会の雰囲気）

### (2) 事業の課題

- ・ 参集方法は、初の試みと言うこともあり、地域の状況に詳しく公正な立場で発言できる人の人選を香川工事から両町に依頼した  
メンバーの公募、人材の育成が課題
- ・ 意見抽出は提示方式（住民案ではなかった）
- ・ まだ地域住民による対案の検討・提案まではできなかった（そこまで踏み込める段階・体制でなかった） WS形式での住民による検討、PCM手法等による評価が課題
- ・ 当時は、「関係者」＝「沿道住民」との認識であったが、地域外の道路利用者の意見収集も必要だったと感じる  
アンケート調査等による道路利用者の意見収集が課題
- ・ 座長一任の委員会と同じ形となっていた（自分の出した意見がどのように反映させたかの透明性は担保されておらず、第三者による運営が課題）  
第三者機関による中立的な運営が課題



写真 6-5 検討会開催風景



写真 6-6 都市計画原案説明会風景

## 2-4 「高松市交通バリアフリー基本構想策定について」(香川県)

発表者：株式会社オリエンタルコンサルタンツ 緒方 剛

### (1) 事業の概要

目的：高齢化社会とノーマライゼーション

対象地域(重点整備地区): JR 高松駅、ことでん高松築港駅～瓦町駅等の周辺地域(約280ha)

#### JR 高松駅の当時の状況

- ・比較的设备が整っており、バリアフリー化も進んでいる

#### ことでん高松築港駅、片原町駅、瓦町駅の当時の状況

- ・ホームと線路の境界が不明確(高松築港駅)
- ・券売機下に蹴込み無し(高松築港駅)
- ・ホーム移動には線路の横断が必要(片原町駅)
- ・階段、エレベーター、エスカレーターが近接(瓦町駅)

#### 主要経路の当時の状況

- ・移動をさまたげる駐車車両、駐輪車両
- ・幅広でフラットなアーケード、ベンチも点在
- ・途中で切れている点字ブロック

#### 業務(基本構想策定)の主な流れ

- ・基本構想策定までの各段階において市民参画の場を設定
- ・アンケート調査の実施
  - ニーズを幅広く捉える
  - 問題・課題整理、対策検討の基礎資料とする
- ・点検まち歩き、ワークショップ
  - 当事者、行政とのコミュニケーション、合意形成の場とする
  - 問題・課題、対策案の具体化を行う
- ・委員会(市民代表、福祉団体の代表を含む)の意見を聞きながら進める
  - 地区の問題・課題の整理、基本方針の設定の検討
  - 意見を計画へ反映させる

### (2) 市民参加の具体的取り組み

#### アンケート調査：調査方法

- ・各種団体へ調査依頼 (H14.8.26～9.13 約3週間)
  - (財)高松身体障害者協会、高松ボランティア協会、高松市老人クラブ連合会、高松

市婦人団体連絡協議会へ調査票を送り、協力をお願いした。

・主要施設で聞き取り調査（H14.9.4（水））

旅客施設（JR 高松駅、こつでん高松築港駅～片原町駅～瓦町駅）官公庁（高松市役所、県庁）病院（県立中央病院、高松赤十字病院）の利用者に対して、調査員が聞き取りによりアンケート調査を行った。回答者の属性を幅広くすること、票数をより多く集めることを目的に、調査方法を2つに分けた。

**【明らかとなった意見】**

- ・道路上の障害物（路上駐車等）段差や、鉄道駅での行き先案内、トイレ使い勝手について不便を感じている人が多い
- ・道路上の段差改良、障害物（路上駐車等）撤去や、鉄道駅でのエレベーター等の整備、行き先案内の整備を望んでいる声が多い

**点検まち歩き・ワークショップ：実施概要**

- ・幅広い視点で点検を行いたく、高齢者、肢体不自由者、視覚障害者、聴覚障害者、介護者に参加して頂いた。（参加者の募集は各種団体（アンケート協力団体）の協力を得た）
- ・当日は名札をつけ、自己紹介（移動班ごと）を実施した。
- ・実施にあたっては、以下3点について特に配慮した。
  - 「参加介護者」は「まちあるきの意見」をできるだけ出す記入を補助するスタッフをつけた
  - 意見の発表は手話通訳
- ・当該市民代表者が委員会に参加した（委員会メンバーの1/3該当）

**成 果：**

- ・多様な意見の抽出
- ・利用者・使用者の視点を重視
- ・現場を共有することで事業実施者（行政・コンサル）も認識をあらためて持てた
- ・相互の信頼関係構築ができ、一步お互いに近づくことができた

**今後の課題：**

- ・合意形成の場にする為にはもう少し時間が必要
- ・身障者以外の利用者も参加・意見交換のできる運営方法を考える必要がある
- ・参加住民に見える形での結果を早期に出す（整備される）ことが、事業のメリハリにつながる
- ・計画と設計・施工のつながりを継続する必要がある

**(3) 質疑応答**

Q1 実現不可能な案についての説明方法で気をつけた点は？

A1 「できるだけ、短くわかりやすく。不可能な案については、警察、自治体から直接回

答してもら。その積み重ねしかないのではと考えている」



写真 6-7 JR 高松駅の状況（当時）



写真 6-8 点検まち歩きの様子

## 2-5 「徳島県みなと緑地広場ワークショップ」(徳島県)

発表者：株式会社環境防災 松永 昭博

### (1) 事業背景

#### 「小松島市本港地区」

- ・ 小松島港周辺の跡地整備 港町として発展してきたが、本四連絡橋開通による衰退(南海フェリーの航路変更)対策(県事業)が必要。
- ・ Aゾーン、Bゾーン、Cゾーンともかつて乗船待ちの車が並んでいたところで、表面はアスファルト舗装で覆われている。
- ・ 小松島市は、四国の東端にあり、人口は4万3千人、面積45km<sup>2</sup>の徳島県有数の港町として発展してきた。この本港地区は中心市街地にあり、関西方面へのフェリーの発着場として大変賑わった。しかし、1998年、明石海峡大橋の開通に伴い、南海フェリーが航路移転し、港湾施設が遊休化している。こうした中、1999年からみなと再生の取り組みが始まり、港のまちづくりを推進するNPO 港まちづくりファンタジーハーバーこまつしまの設立、2004年にはみなとオアシスに登録され、徐々に人が集まる場所になってきている。

#### 「港空間づくりプランの市民提案(2004年)」

<港空間づくりの市民提案>

- ・ Aゾーンは、多目的広場ゾーンとして、駐車場と多目的広場を整備
  - ・ Bゾーンは、交流ゾーンとして岸壁沿いにウッドデッキを配置。ヨットを陸揚げして管理する陸地型ヨットハーバーの絵もある。NPOが収入を得ながら港の風景をつくることとする
  - ・ Cゾーンはスポーツ広場ゾーンとして整備
- 上記の市民提案の陸地型ヨットハーバーを無くし、ウッドデッキを南へ伸ばした案を県は基本構想とした。

### (2) WSのプロセス

- ・ みなと緑地広場ワークショップは、NPO こまつしまの企画運営で開催されたものづくりワークショップ(ワークショップと設計の関連を図示示す)。
- ・ NPO、地元関係者、行政による情報や人的交流の場として連絡調整会議を設けた。
- ・ 昨年、2月から4月までの間にワークショップを3回開催。
- ・ 第1回ワークショップの後、緑地広場の素案を作成し、第2回ワークショップへ提示。
- ・ 素案に対する応援意見と修正意見をもらい、素案を修正して第3回WSへ提示。
- ・ 6月に基本設計案をKocoloへ掲示し、情報提供。実施設計をとりまとめ、第3回連絡調整会議へ報告した後、実施設計案を確定し、Kocoloへ掲示。

## WSの開催概要とプログラム

情報共有とグループ毎の検討作業に分かれる。

情報共有として、これまでのとりくみを説明した後、検討作業では、計画地の情報抽出をテーマに、計画地での利用、活動の情報や必要な機能と欲しい施設、参加について意見交換を行った。毎回ワークショップを行う際、前回のおさらいや振り返りを行うことで参加者間の情報共有やイメージの乖離を防いだ。その後素案に対する応援意見と修正意見を出し合った。

## WSの参加形態

参加者の属性では、NPO こまつしまと港の清掃活動などでボランティア認証制度を交わす地元高校の生徒や教師の参加が得られた。市民の一般には、地元の商工会議所や青年会議所のメンバーが含まれている。各回とも参加者の7割は、NPOの会員、行政、コンサルで占められている。

## WSの広報

参加者募集は、地元新聞への折り込みチラシ1万4千部、地元団体等への直接訪問と電話・FAX、Kocoloへの置きチラシ、NPO会員へのダイレクトメールといった方法で行った。ワークショップの結果をまとめた広報紙の発行・配布とKocoloでの設計図面掲示を行った。

## WSの特徴

- ・ NPO こまつしまがワークショップの企画運営を実施
- ・ ボランティア認証制度を交わす地元高校の生徒が参加し、教育分野が連携
- ・ 市民、NPO こまつしまの会員、行政の参加比率は約1：1：1
- ・ 2004年の市民提案作成時の参加者やなど地区の状況に精通した人が多く参加

## 設計案づくりの進め方

多様な意見をキーワードでグルーピングし、方向性を把握した上で整備イメージを共有。

設計案への理解を得やすくするため、案の説明では、WS意見を「反映したこと」「反映できなかったこと」「検討して欲しいこと」の3つに仕分けして説明。

## AゾーンのWS意見と整備イメージ

「常時の駐車場を備えた開放感のあるフリーマーケット広場」が整備イメージ。

駐車場、電気、水道などイベント対応施設を充実して欲しい。舗装材、空間の使い方、安全対策に対する要望や植栽計画に対する相反する意見。

## BゾーンのWS意見と整備イメージ

「海を眺めながらくつろぐハーバーイベント広場」が整備イメージ。

ウッドデッキの広場に対するニーズは高い。日陰の作り方については相反する意見

陸地型ヨットハーバー、港のシンボル、客動線と施設出入口の一体化、安全対策

### **CゾーンのWS意見と整備イメージ**

「しおかぜ公園と一体となった健康とスポーツの広場」が整備イメージ。  
ミニバスケットができるスポーツ広場とイベント時の臨時駐車場。  
防犯と植栽保全といった既存樹木の取り扱いに対する相反する意見。

### **維持管理面での要望**

維持管理を行う小松島市から意見を聞く。維持管理の容易さを求められた。  
安全対策の徹底と車両乗り捨てがされにくい施設づくり。

### **みなと緑地広場整備のコンセプト**

- 「マルチユースデザイン」日常的利用、イベント的利用
- 「空間の一体的利用」Kocolo、しおかぜ公園、岸壁など既存の施設との一体化
- 「ユニバーサルデザイン」すべての人が使いやすいデザイン
- 「安全・安心な空間づくり」事故防止と防犯性を高めたデザイン
- 「維持管理がしやすい施設づくり」維持管理に手間のかからないデザイン

### **コンセプトの具体化**

- 空間の一体的利用・・・動線をつなぐ、障害を取り除く、向こうを見せて行ってみたい気持ちにさせる
- ユニバーサルデザイン・・・幅の確保と緩勾配、段差の解消、行き止まりをなくす
- 安全安心な空間づくり・・・死角を無くす、照度の確保
- 維持管理・・・防草や耐久性のある材料と構造の工夫
- 意見を「反映したこと」「反映できなかったこと」「検討して欲しいこと」に仕分け

### **WSで検討をお願いした意見**

トイレの設置、修景材としての手形プレート類、港のシンボルやタワー、既存の自転車置場の取り扱い、スポーツ広場の大きさなど。

## 設計案に反映できなかった WS 意見

WS で出てきた意見の中で、反映できなかった意見とその理由は以下のとおりとなった。

反映できなかった意見	反映できなかった理由
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 足湯</li> <li>・ 陸地型ヨットハーバー（駐車場としてスペースのみ確保）</li> </ul>	補助事業対象外
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ kocolo 建物を異人館風に修景（小松島市の所有物）</li> </ul>	事業の範囲外
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ゴミ箱設置（コストとエコライフの視点）</li> </ul>	維持管理コスト大
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ フットサルグラウンド（防球対策が困難）</li> <li>・ デッキの床をガラスに（ガラスにしても海は見えない）</li> <li>・ スポーツ広場の As 舗装をやめる（As はバスケットに向く）</li> </ul>	計画の合理性を欠く
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ウッドデッキをコンクリートデッキに</li> <li>・ スポーツ広場を芝生広場に</li> </ul>	WS で収れんした意見の反対

## トレードオフ関係にあった WS の意見とその解決策

WS で出てきた意見の中で、トレードオフ関係にあった意見とその解決策については、以下のとおりとなった。

対 象	トレードオフ関係の意見	解決策（結果）
A ゾーンの植栽計画	<p>イベント時、植栽は邪魔。少なく。</p> <p>日常的に緑陰や憩いの空間として必要</p>	2列を1列にしたり、徐々に減らす。最後は無くす。
B ゾーンの休憩施設の屋根	<p>夏の日差しや雨をしのぐ屋根がある。</p> <p>パーゴラのように明るい方がいい。</p>	アルミ板を重ねて屋根に。構造を工夫。
岸壁部の構造	<p>ヨットへの物資供給のため車を入れる。</p> <p>ウッドデッキを貼って車を入れない。</p>	頻度が少ないのでヨットを優先。
C ゾーンの現況樹木	<p>うっそうとしているので樹木を撤去。</p> <p>既存の植栽は極力残す。</p>	クスノキの大木を残し、明るい空間に。
C ゾーンのスポーツ施設	<p>臨時駐車場としても使えるように。</p> <p>スポーツ専用広場に。</p>	兼用できる構造に。

## 合意形成に留意したこと

整備イメージを共有する

すべての種類の WS 意見の取り扱いについて説明する

悩ましい問題は、思い切って参加者に検討をお願いする



## 現況施設の利用状況

現況施設の利用状況は、日常的には区域 C と区域 E、Kocolo に隣接する北側と南側のスペースが Kocolo 利用者の駐車場として使われている。大規模イベントの開催時には、区域 A、B、C をフリーマーケットの会場として使い、区域 E、F、G を臨時駐車場として使っている。反対に中規模イベント開催時は、区域 E、F をイベント会場に、区域 A、C を臨時駐車場としている。またヨット関連のハーバーイベントの開催時は、区域 D、E をイベント会場に使っている。

### (3) 質疑応答

Q1 みんな納得して、「声の大きい意見に従った」のか？

A1 本当に必要なのかを検討してもらった（施設内にまったくないわけではない。行政側の事情も正直に説明し、相互の立場を理解しあいあった）。そのなかで参加者が答えを出してきた。それが「声の大きい人」だったかもしれないが、合意は得られたと考えている。

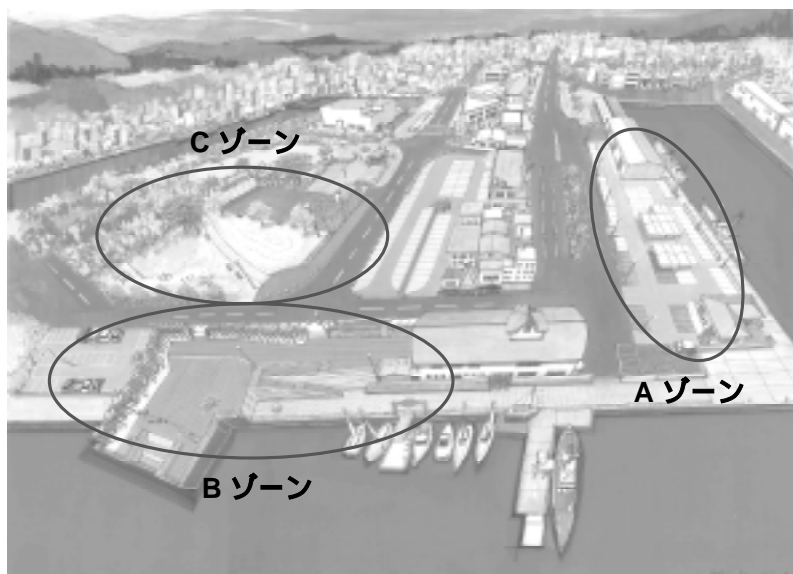


図 6-1 A・B・C 各ゾーン



写真 6-9 ワークショップ開催風景

## 2-6 「子供たちによる景観計画づくりワークショップ」(高知県)

発表者：高知工科大学 嶋岡 強太

### (1) 事業の概要

これからの社会を担う子供たちに、地域の景観を意識してもらう目的で小学生を対象に景観計画を考えてもらった。

### 実施スケジュール

本年度は3校の小学校を対象とした。入野小学校と佐岡小学校の2校は現時点で本年度分が終わっているので、その2校での取り組みを発表する。

### 町歩きとガリバー地図作りの実施概要

#### ・町歩きとガリバー地図作りのプログラム

Step1 はオリエンテーション、Step2 では街歩き、Step3 ではガリバー地図の作成、最後に Step4 で発表と講評を実施

#### Step1 オリエンテーション

- ・ 30分で構成。
- ・ ワークショップの目的と流れを説明。
- ・ 児童の緊張をほぐすための要素と、街歩きを行うためのグループアンケートを行うという2つの要素を含んでいる。
- ・ グループに分かれた後には、街歩きのために歩くコースや役割を実際にグループで決めてもらう。安全面等の問題があるため、各グループに1名スタッフを付ける。

#### Step2 街歩きの設計

- ・ 街歩きは60分で構成。
- ・ 実際に街歩きを行う上でのテーマは、風景・景観で良い所、悪い所を探しながら児童に町を歩いて対象物をインスタントカメラで撮影してもらう。その際に写真を撮った箇所、感じた事を手持ちの地図やメモ帳に記入してもらう。

#### Step3 ガリバー地図の作成

- ・ 60分で構成。
- ・ 街歩き後に帰ってきて、グループに分かれて写真に番号や題名をつけてもらったり、思った事や感じた事を吹き出しに記入してもらう。また、さっきの良い所、悪い所をシールで分けて地図上に貼り付けてもらう。さらには、地図のシールから引き出し線を引いて、写真と吹き出しを貼って表現する。

#### Step4 発表と講評

- ・ 30分で構成。
- ・ 完成したガリバー地図を囲んで座ってもらい、グループリーダーが地図の上に乗って、グループ毎に歩いた地区の景観を紹介してもらおう。発表後に講評と学習のまとめを行い、学習の終了。

#### 街歩きとガリバー地図作りの実施

[ 昨年の12月15日に行った佐岡小学校でのワークショップ風景を紹介 ]

- ・ 発表者はファシリテーターとして進行役を務めた。
- ・ パワーポイントは、小学生が対象という事でありあまり字を使った物ではなく、主に絵を使って小学生にも理解しやすいように工夫を凝らした。
- ・ 街歩き後に行うグループに分かれての作業では、写真にタイトルを書いたり、吹き出しに思った事や感じた事を記入してもらおう。胸に名札を付けたスタッフが1名入って、グループの中での進行を行った。
- ・ 地図の上に乗っての作業では、風景・景観として良い所を緑のシール、悪い所を赤のシールで写真を撮った場所に貼って表現した。
- ・ 見やすさを重視するために、シールから引き出し線を引いて周りの余白に写真と吹き出しを付けた。

#### 完成したガリバー地図の紹介

佐岡小学校の周りは非常に自然が多かったということもあり、自然に視点を置いた写真が目立っていた。具体的には、遠くに見える彩りのある山であったり田園風景、あるいは季節を感じる果物の木などで、佐岡の特性が盛り込まれたガリバー地図になっていた。

一方、悪いところとしては、さびれて使われていない看板であったりゴミの放置などが写真に収められていた。地図完成後にグループのリーダーが地図の上に乗って発表を行い、各グループ、リーダーの他に補助を付け、自分たちが回った地区の上に乗って写真を紹介した。

#### 町並み景観計画作りの実施内容説明

街歩きとガリバー地図作りと同様に、4つのStepで構成。

#### Step1 オリエンテーション

- ・ 30分で構成
- ・ ワークショップの流れとを実際に説明

#### Step2 貼り絵作り

- ・ 60分で構成
- ・ 貼り絵の目的は電柱の地中化、あるいはゴミの撤去など図面による景観の変化から風景を変える、あるいは風景を作ることができるという事を学んでもらう。

- ・ 貼り絵の素材は、木や葉で谷や生垣等を用意して、子供たちが住んでいる地区に貼り絵を行う。
- ・ 作った貼り絵のシートは、計画作り用ガリバーシートに、風景を変えた内容を含め貼るという内容。

### Step3 計画作り

- ・ 60分で構成。
- ・ 前回作ったガリバー地図から良い所、悪い所を読み取って計画を作る上での基礎を作る。
- ・ 計画内容は、街のここをこういう風に変えたい、あるいは残したいと考えて貼り絵で行った内容を中心に、ワークシートに記入してもらう。
- ・ シートが完成したらグループ毎にまとめを行い発表練習を行う。

### Step4 発表と講評

- ・ 30分で構成。
- ・ 第2回同様にガリバーシートを囲んで座ってもらい、グループ毎に計画した内容を紹介してもらう。
- ・ 発表後に講評と学習の3回の学習を通してのまとめを発表してもらい、学習の終了。

## 町並み景観計画作りの実施

昨年12月13日、今度は高知県の西部にある入野小学校でのワークショップを紹介。入野小学校は4年生37名が対象。

体育館で実施。計画作り用のガリバー地図を使用。生徒達が住んでいる地区の貼り絵シートを各地区数枚用意。貼り絵の素材は生垣、花等を用意。地図の上で電柱やゴミの放置をモンタージュして消すという作業をする事で、少しの工夫で風景が変化するという事を生徒にイメージしてもらう。実際に児童が作成した地図では、木で歩道を作ったり街路樹を等間隔で植える等、「道」に視点を置いた計画が出来上がった。その他空き地を花畑にしたり、国道沿いの雑居している看板を木で隠す等の計画内容を一枚のシートに盛り込む。地図完成後に各グループのリーダーが作成した計画内容を発表。

最後に講評と学習を通してのまとめを実施した。

## WSのまとめ

### カリキュラムの構成について

- ・ 以降の授業の基礎作りの為に第1回目にスライドショー実施、地図作り導入が目的。
- ・ 普段とは違う視点で生徒が住んでいる地区全体を知ってもらう。
- ・ 地図を用いる事により、情報を読み取り易くする。
- ・ 生徒の学習意欲を高める。
- ・ 手や体を動かしながら楽しく学習できる。

### モンタージュの使用について

- ・ イメージを作り易い。
- ・ 電柱を地中化したり物を撤去する事で、少しの工夫で風景は変化するという事を学んで

もらう。

- ・元の写真と比較し、変化した部分を見つけさせる事で生徒の関心を引き、楽しく学習を行う。

#### **貼り絵作りの導入について**

- ・生徒たちの手で風景を変える事が出来る
- ・少しの工夫で風景を変えられるという事を学んでもらう
- ・生徒たちが良いと思う景観作りが行える
- ・実際に住んでいる地区の地図を土台にする事で、関心を持って学べる

#### **計画づくり用ガリパーシートの使用について**

- ・計画内容が理解し易い
- ・計画内容を自由に書き込める

#### **ワークシートの導入について**

- ・全体の計画を行う
- ・小学生にも作成し易い計画づくり
- ・作業効率の向上

### **(2) 事業の成果**

#### **児童側**

- ・景観に対する興味、関心を持ってもらえた
- ・自分たちの住んでいる町に愛着を持ってもらえた
- ・貼り絵作り導入によって少しの工夫で風景を変えられるという事を学んでもらえた

#### **実施側**

- ・普段とは違う視点で町を見てもらえた
- ・生徒たち自身で風景を変化させるアイデアを引き出せた
- ・WS形式での学習により共同作業の重要性を共有できた
- ・楽しく学んでもらえた

### **(3) 事業の課題**

#### **児童側**

- ・街歩きの範囲が広く時間内に回る事が困難であった
- ・貼り絵シートの導入が初めてであったので、バリエーションが少なかった
- ・休憩時間があまり設けられなかった

#### **実施側**

- ・低学年には街歩きの範囲が広がった
- ・時間的余裕がなく、休憩時間が少なかった

#### **全体**

- ・スタッフの確保が困難であった



写真 6-10 授業の様子



写真 6-11 授業の様子